

第二十五回

中お郡生の会

定家お郡生

福の神 野村万蔵

令和元年11月4日(月・祝)午後2時始

喜多六平太記念能楽堂

番組

おはなし

関幸彦(日本大学教授)

狂言

福の神

野村万蔵

河野晶佑  
能村人紀

休憩二十分

能

中村邦生

定家

宝生欣哉

國川純  
成田達志

一噌隆之

野口能弘  
御厨誠吾

野村万蔵

内田安信  
狩野了一

佐藤寛泰  
内田成信  
友枝雄人  
金子敬一郎

大村靖定  
香川昭世  
友枝昭茂

終了予定時刻 五時頃

チケット料金

全自由席  
(座席指定可/指定料¥1,000)

一般券	正面・脇正面	¥6,000
	中正面	¥5,000
	二階席	¥3,000
学生席(二階席)		¥2,000

チケット販売開始は、9月20日頃の予定

あらすじ

定家(ていか)

京を訪れた北国の僧が千本の辺りまで来ると、時雨が降り始めたので近くの東屋で雨宿りをすると、そこへ一人の女が現れ、この地はかつて藤原定家が雨の風情を眺めるために建てた「時雨亭」であると教える。やがて一行を式子内親王の墓に案内した女は、石塔を覆っている葛こそ定家の執心が変じた「定家葛」と告げる。かつて内親王と定家とは恋仲であったが、世間に浮名が立ったため逢うことが叶わなくなった。そうする内に亡くなった内親王への定家の思いが葛となり、こうして、今なお纏わりついているのだった。女は、自分こそ内親王の霊だと明かすと、束縛の苦しみからの救済を願いつつ、姿を消してしまう。僧が叩いていると、石塔の内に憔悴した式子内親王の霊が現れる。僧は法華経の功德によって葛をほどき、彼女はあらわになった自らの衰えを恥じると石塔へと戻ってゆき、そこに再び葛が這い纏うのだった。

福の神(ふくのかみ)

二人の男が、福の神の社で参拝を済ませて豆をまきはじめると、笑い声がして福の神が現れる。福の神は神酒を催促し、豊かになるには元手があると話す。二人が、元手がないからここに来たと反論すると、福の神は「元手とは金銀や米などではなく、心持ちのことだ」と諭す。さらに、福の神に神酒をたくさん捧げれば楽しくなること間違いのないと言って笑って帰っていく。

\*なお、会場での撮影・録画・録音は、堅くお断りします。

又、携帯電話等、音の出る物もご遠慮お願いいたします。

☆お問合せ

・中村邦生の会

TEL 03-5310-5690

・喜多六平太記念能楽堂

TEL 03-3491-8813



〒141-0021 東京都品川区上大崎4-6-9

\*JR線・東急目黒線・都営三田線・東京メトロ南北線ともに目黒駅下車、徒歩7分